

Ⅲ. 社会への回帰

学びの森の住人たち (15)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



3. ラウンドテーブル

「前例のないことを創り上げるようなプロジェクトを、従来の会議の形式の中で行なうことは大変難しい」

これが4年間、不登校の学習評価実現に向けての会議を主催した私たちの正直な感想でした。教育という枠組みにおいては、前例のないことについては、その責任をだれが負うのかという問題が大きく付きまとい、さらに出席者のそれぞれの立場やメンバー同士の関係性が阻害要因となって、創造的な意見や考え方が出にくくなってしまいうということもわかってきました。

そんな経験と反省を持っていた私たちは、教育という枠を超えた形で、不登校の子どもたちの支援にかかわる関係者の学びの場をもてないものかと模索を続けていました。そんな中、京都府青少年課の担当者の方とチーム絆の地域チームの立ち上げをめぐる幾度となく創造的な議論を重ねる機会があ

り、「この議論の場に他の人が参加すれば面白いよね」という発想が生まれ、やがてそれが「南丹ラウンドテーブル」というカタチで現実化することになっていきました。

私たちは、ラウンドテーブルの開催にあたり、二つのことを前提にしました。一つ目は、参加者は、その肩書や立場を一旦横に置いて個人として参加してもらおうということ。これは、肩書や立場が邪魔をして創造的な議論ができなかったというこれまでの反省に基づくものです。あくまでラウンドテーブルでは、自由な個人の意見を出してもらいたいのです。二つ目は、今まで「あたり前」と思っていたことをもう一度問い直してもらいたいということでした。例えば、日々子どもたちの支援に携わっておられる方々に、「支援とは何か」ということをあえて投げかけてみたかったのです。そうすることで既存のフレームが揺らぎ、新しいフレームづくりのヒントが生まれると考えたからです。

そして2011年、京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生に協力をいただきながら、子ども若者の支援者たちの学びの場、「南丹ラウンドテーブル」がスタートしました。その参加者は、小中高校の教員、管理職、教育行政関係者、福祉行政関係者、マスコミ関係者、不登校経験者、心理職、精神保健関係者、保健所関係者、福祉施設職員、NPO団体関係者、大学教員、学生、フリースクール職員など実に多岐にわたっています。

多様な領域からの参加者があるということは、あたりまえを問い直すには最高の条件です。同じ領域の参加者では、あたりまえはあたりまえに過ぎず、そこにいちいち立ち止まることはないでしょう。ところが、自分たちとは違った領域の参加者は、そのあたりまえに何らかの問いを抱くのです。このような自分たちとは異なる領域の人たちとの対話を通して、既存の概念を再構築していく過程、これは第二章で取り上げ、さらにアウラの森の根幹となる学力観である DeSeCo プロジェクトのキーコンピテンシーと重なっていくものです。そして、ここにもアウラの森の学びの階層性（生徒たちも教師たちも異なる階層で、同じキーコンピテンシーを学んでいる）が表現されているのです。

ラウンドテーブルは、約3時間のディスカッショングループです。私たち

はそれを休憩なしのノンストップで行います。実際の場面では、あるテーマに沿って、私の方からアウラの森の子どもたちの主に変容に関するエピソードと、それについての私の視点が紹介されます。この時、私自身はエピソードの中に当事者としても登場しますから、そこには当事者としての私の視点と、それを省察的に眺める少しずらした私の視点が二重に紹介されることになります。当日のラウンドテーブルの仕掛けとしては、たったこれだけです。あとは、場の進行を川畑先生にお願いし、私自身も参加者の一人としてこの場に臨むのです。

アウラの森の大きなヘゴの木の下丸いテーブルを囲んでラウンドテーブルは行われます。広い吹き抜けの空間にはやわらかい陽射しが差し込み、ゆったりとしたクラシック音楽とほろ苦いコーヒーの香りに囲まれてディスカッションが進行していきます。全く予定調和ではない進行のもと、参加者から出される意見や考え、経験や思い、それらがそれぞれの物語となってその場に交差していきます。決して何か確定された答えを出すような場ではなく、その場で感じたり考えたりしたことを参加者が持ち帰り、自分たちの職場や学校や家庭といったそれぞれのフィールドで再びそれぞれの答えを模索していけるようなそんな場が展開されているように思います。

以下の文章は、ラウンドテーブルの案

内用のチラシの中からの引用です。

ラウンドテーブルは、若者の支援に携わる支援者のための学びの場です。ここでは、支援の現場に生じる「あたりまえ」のことをあらためて振り返ってみることで、支援そのもののあり方やその意味を問い直そうという意図が働いています。実際、その「あたりまえ」を何度も問い直してみると、そこには自然と支援される人たちの物語が現れ、さらにそこに支援者の物語も重なっていきます。そしていくつもの物語が複数のストーリーラインを描き始める時、そこに新しい「意味」が生じていくように思うのです。今回は、そんなみなさんがこのラウンドテーブルから得た新しい意味をどういった形で生活、あるいは職場の中でご活用されているのかをぜひ語っていただきたいと考えています。

